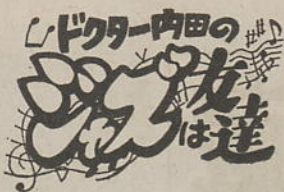


守安祥太郎の紹介で、初めて会った宮沢昭は、その時、二十五歳。僕よりひとつ年上だった。

豪放さと温かい心

その彼が、今も第一線にある

って別格的な存在とされるのは、日本のモダンジャズが、



あれは、二人の子供さんの教育費をかせぐために、やむなくジャズ界を去った宮沢が、その責務を終えた後、僕らYJC制作のアルバム「マイ・ピッコロ」をきっかけに、本格的ジャズ活動を再開して間もなくだった。

以前「ブルーコーツオーケストラ」のサクセスセクションで、一緒に仕事をしたことのある後輩の一人が、生活を再びジャズ一本にしほつたのを心配して、静岡の「つま恋」でコンサートを企画してくれた時のことだ。

試行錯誤を繰り返した混沌の一時に、渡辺貞夫とともに、「秋吉敏子のコーシヤクインテット」に参加して、ひたすらジャズの本道を追求し続けたという過去ばかりではなく、常に前進し、挑戦しつづけるその音楽的姿勢にある。

彼のテナーサクスは、男性

そらつて会えるのが楽しみだったからでもある。

楽器片手に会場へ

宮沢を迎えて大喜びの貞夫は、「おれも一緒に吹かせて

満員の聴衆が沸く 宮沢と貞夫の競演

お招きを受けた僕は、喜んで相模原に転居していた宮沢と落ち合うことにした。たま

は、毎年その季節に、作曲のため合宿している渡辺貞夫が滞在しているところを知っていたから、二人に

ら、後半からお願いできませんか」。ジャズメン気質を知らないなあ。

出はなをくじかれた貞夫は、「一調子狂っちゃったなあ。もつおれやらないよ。部屋に帰るからね」。そう言い残して消えてしまった。

「困ったなあ。お客さんも友の音か耳について、部屋に

ぬか喜びでは気の毒だしねえ」。自分もお客のくせに、何だか板ばさみになった心境だ。

いてもじつとしてられなかつたんだろうねえ。「やっぱり、おれもやるよ」。ちよっと照れをこそうに、そつさやいた貞夫は、勢いよくステージに飛び出した。どつというどよめきの中、宮沢と貞夫は、顔を見合わせながら吹きまくり、心ゆくまで気心の知れた互いの会話を楽しむ風だった。

胸に迫るステージ

ミュージシャンってうらやましいね。やがてリズムの三人を制止した貞夫は、ついにコンサートの終わりまで、二人だけの即興的な対話を続けて、居合わせたその夜の満員の聴衆に、ジャズのすばらしさを満喫させてくれたのだ。

そのあと深夜まで続いた貞夫の部屋での三人の酒と語りいが、どんなに楽しかったかは言うまでもない。

それにしても、ステージでのあの美しい光景は、思い出しても胸がじんとしてしまふなあ。



飛び入りで参加、宮沢昭とサクスの競演をした渡辺貞夫(左) 昭和60年12月、静岡県掛川市のつま恋で